

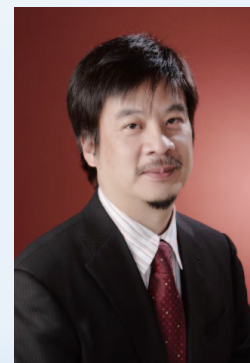
エボラ出血熱は全身出血を伴う致死的な病気ですが最新の統計によれば出血は5%未満であり、発熱(86%)、下痢などの一般感染症症状が中心のためエボラウイルス感染症(Ebola Virus Disease)と総称、未成年の感染者では43%の方が回復しています。体内ウイルス量が少ないほど治りやすいため一般感染症同様早期発見・治療が大切です。治療は脱水・栄養対策ですが治療薬として日本の製薬会社の抗インフルエンザ薬が年内に外国で適応されます。変異を繰り返すインフルエンザより構造が簡単なエボラウイルス治療薬は早期に合成できると考えます。ワクチンも流行が今まで中央アフリカに局限した稀な疾患のため利益も望めず開発されずにきましたが、今は製薬会社が競って研究を進めています。エボラウイルスの飛沫感染はありえません。感染者が嘔吐、下痢し体に傷などのあるひとがそれに接触しない限りうつりません。しかし西アフリカでは毎日多くの方が治療を受けることなく亡くなっており世界各

地、日本からも人的援助がなされています。ワクチンが作成され医療従事者が安全に診療できるようになることを期待、更に尊い精神を持った方々が帰国後偏見を受けないよう冷静に行動しましょう。1980年代のエイズ騒動と同じ過ちは避けましょう。

世界的に見れば貧困、栄養障害などの問題を抱える西アフリカ(シエラレオネの平均寿命は46歳)での惨状に総力を挙げて対策を講じています。栄養状態の改善、衛生状態の改善を計画しながらのワクチン・抗ウイルス薬の開発、安価での提供などは医療だけの課題ではなく政治・経済含めた戦略が必須です。

日本の国民は栄養状態もよく通常の医療体制は充実、エボラウイルスなどの特定感染症治療には医療費の自己負担はありません。特定感染症は患者が殆どわが国にはいないため専門医療機関が少ないのは当然です。しかし計画されている隔離対策がとられれば感染している方もウイルス量が少ないう

ちに専門医療機関で治療ができます。医療従事者は標準防御に加え防護服の装着手順確認など準備を進めています。またわが国の医療機関は保健所の指導監督の下に医療を行います。エボラウイルス感染症の多発地から帰国し不幸にして発熱があった場合の連絡先は医療機関でなく保健所(甲府では中北保健所:電話055-237-1381)です。その指示に従ってください。また日頃の手洗いの励行、下痢などした場合の自宅での対策を今一度家族で確認しましょう。そうすることが全ての感染症から人類を守る重要な第一歩となります。



にしおか内科
クリニックRA 院長
西岡 雄一

専門分野は関節リウマチ、痛風、気管支喘息、漢方薬治療。地元のファミリードクターとして、一般内科も診察。ラジオドクターとしても活躍中。